

# 御仕法に尽力した相馬の人々

天明の飢饉（1783~84）は、相馬中村藩にも甚大な被害をもたらした。その後、藩の人口は3分の1ほどに減少してしまいました。そこで、相馬中村藩第11代藩主相馬益胤<sup>ますたね</sup>は、身分が低くとも優秀な者は重要な役職に登用し、藩の立て直しを図りました。後に御仕法の推進役となる江戸家老草野正辰や国家老池田胤直らはこのときに選ばれました。

12代藩主相馬充胤<sup>みちたね</sup>は、父益胤の志を継いで藩の復興に力をそそぎ、真宗移民政策と御仕法に積極的に取り組みました。

中村藩士の子として生まれた富田高慶<sup>こうけい</sup>は、江戸で修学中に尊徳に入門し、一番弟子となりました。また、尊徳の娘と結婚するなど尊徳の絶大な信頼のもと、尊徳の代理として相馬中村藩の御仕法を成功に導きました。

富田高慶の甥（兄の子）斎藤高行<sup>たかゆき</sup>も尊徳に入門、高慶とともに二宮四大門人の一人に数えられ、藩の復興に尽力しました。

中村藩士の家に生まれた荒至重<sup>むねしげ</sup>は、江戸修学で算術や測量術を学び、その後尊徳入門しました。藩内の水利事業を数多く手がけ御仕法を成功に導きました。